

科目担当者氏名		科目担当者連絡先（メールアドレス）	
小林大祐・山中千恵・島岡哉			
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
織田 暁子		仁愛大学 人間学部 コミュニケーション学科	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会調査演習 b	JNAa-140702-2	13人	

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：

このデータを用いた成果は、昨年度の『社会調査演習報告書』にも、第1部「越前市民の働き方と暮らしについてのアンケート調査結果」としてまとめられている。それにもかかわらず、本年度も同じデータを用いた理由は、昨年度は詳細なデータ分析にまで踏み込めなかったことがある。実査が長引き11月になってからの分析となったため仕方のないことではあったが、貴重な情報が詰まったデータである。これを昨年度の一回のみの分析で用いなくなるのは、いかにももったいない。このような理由で、今年度は実査を行わない代わりに、多変量解析の技法をしっかりとマスターしてもらった上で、1年を掛けてじっくりとデータと向き合ってもらおうと考えたのである。ということで、小林班の受講生13名は、前期には多変量解析の技法について理論的に理解した上で、SPSS上で「使える」ようになれるよう力を注いだ。また、データを触りながら、変数の加工や合成など、自分の関心に即してデータをハンドリングできるようになってもらった。そして後期からは、前期で習得した分析技法を用いて、本格的に自分たちの問題関心からの分析を始めてもらった。その際、2変数間の関連の記述にとどまるのではなく、可能な限り多変量解析を用いて、真の関連に迫ることを心がけて各自分析を進めることを課した。その努力がどこまで実を結んだかは、読者の判断にゆだねるとしても、どちらかといえば「報告」の域にあった昨年度の分析よりも、より「データ分析」に近づいているのではないかと考えている。

II. 調査の企画・設計（デザイン）

1. 調査のテーマ／領域：

越前市民のくらしと働き方

2. 調査の内容／概要：

越前市民を対象として昨年度に実施した「越前市民のくらしと働き方についてのアンケート調査」（以下では「越前市民調査」と表記）のデータを用いた2次分析によって報告書を作成した。

3. 調査の範囲／対象（量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入）：

母集団は、越前市に在住の20歳から74歳の男女で、計画サンプルサイズは800である（宛先不明で返送されてきたものが10件あったため調査対象サンプル数は790）。抽出方法は、選挙人名簿を用いた2段無作為抽出である。

4. 主な調査項目：

初職、現職、収入、階層意識、政治意識など

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集（現地調査）の方法：

郵送法による調査票調査

6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：

2013年9月・越前市・11名

7. 収集したデータの量と質への評価（量的調査の場合は有効回収票及び回収率を必ず記入）：

有効回収数437。有効サンプル数は790なので、有効回収率は55.3%

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析／解釈の方法：

SPSSを用いた多変量解析

9. 調査の成果（調査から得られた主な知見など）：

越前市民の幸福度の規定要因などについて貴重な知見が得られた。

10. 報告書刊行の予定と概要：

2015年3月刊行